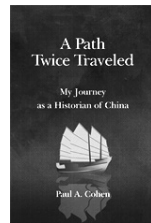


戦後第一世代アメリカ人研究者の 辿った人生

Paul A. Cohen
*A Path Twice Traveled: My
 Journey as a Historian of
 China*



15.24 × 22.61cm 316頁
 Harvard University Press
 [US \$33.00]

本野 英一

日本とは異なり、一九世紀まで中国との交流が全くなかったアメリカ社会から中国史研究者はどのようにして出現するのか。特に、戦後世代研究者の場合はどうなのか。こういう関心を抱いて本書を読んでみた。

本書の著者、ポール・A・コーエンは、アメリカ歴史学界における中国近代史研究の大家で、その著書の一つは、刊行当時世界的な反響を呼び、佐藤慎一によって邦訳（『知の帝国主義 オリエンタリズムと中国像』平凡社、一九八八年）されている。しかし、それ以外の著作については日本で殆ど知られていない。まして、著者がどのような着想を抱いて取り組んだ成果なのかについてはなおさらである。

著者は、数学を得意とする裕福な縫製工場主の息子に生まれた。父親は三つの病院の創設者、理事にもなった成功者で

あった。しかし、それは医者になるという若き日の夢を断念することで得られた幸福であった。自らの無念の思いを子供たちに繰り返し返させたくないという父親の願いのおかげで、著者は自分の好きな職業選択の道を歩ませて貰えたのだという。

それでも、著者が生涯の仕事となる中国史研究とめぐりあうまでには紆余曲折があった。そもそも著者は、文学部史学科の学生ではなかった。一九五二年秋、コーネル大学工学部に入学したもののわずか半年で中退し、専攻を芸術や科学に宗旨替えし、翌年から一九五四年までシカゴ大学で過ごした後、当時の男子学生なら当たり前だった二年間の兵役に就くことが嫌で二人の友人に相談を持ちかけたところ、「軍隊に入るな。春からハーヴァードに來い」という返事を貰い、そこで受けたエドウィン・ライシャワーとジョン・キング・フェア

バンクの講義に啓発されて東アジア史研究を志すことになったのだという。

この時期に彼が受けていた学者修業は、ハーヴァードでベンジャミン・シウォールツとフェアバンクから直接受けた指導だけではなかった。一九五四年夏にフランスで受けたフランス語研修に続き、一九六〇年秋から一九六二年一月にかけて台湾で進めた中国語研修、文献調査と論文執筆、そして大学教師就職活動の傍ら、台北を拠点に東京に飛んで、著者と問題意識を共有する日本人学者（誰であったか不明）と交流したほか、ロンドンやパリに飛んで公文書館で史料を欲しいだけ手に入れていた。誰もがデジタルカメラ、タブレット端末を利用して大量の文書史料を即座に入手管理できる現在とはわけが違う。全て基本的に鉛筆による複写しかできなかった時代にこんなことをしていたということは、著者が、おそらく手間暇金のかかる贅沢な作業をこなしていたことを意味する。そのスケールの大きさ、金のかけ方は、同時代の日本人研究者が逆立ちしてもできるものではない。なぜなら、この頃の東京―ロンドン間往復航空運賃は、国立大学教授の年収に匹敵する値段だったのだから。

これほど恵まれた環境で研究者人生を歩み始めた著者の関心は何であったのか。それは、イギリスとの二度の戦争に敗

北し、それまで世界最高であることを信じて疑ったこともなかった自分たちの国家体制の何をどのように改善し、何を維持しなければならなかったのかを苦悩する知識人であった。著者が学位論文の主題として選んだのは、一九世紀後半の思想家、ジャーナリストであった王韜である。彼の生涯と思想を通じて著者が追究したのは、儒教（朱子学）に基づく価値観を温存しながら西洋の文物を導入可能にする国家体制改変を「近代化 modernization」と呼べるのかという問題であった。

これは、「改革開放」体制移行後の中国共産党が目下直面している問題の先行形態であり、中国共産党のすることなら何でも「ご無理ごもつとも」で押し通すわが国のふがない中国近現代史研究者が見て見ぬふりをするが、その実極めて重要な問題である。

学位論文を単著にまとめた著者が次に取り組んだのは、中国の体制変革を、西洋人（というよりもアメリカ人）の基準に沿って、外から解釈評価する発想に対する批判である。著者がこの問題の重要性に気づいたきっかけは、ベトナム戦争、ローマクラブの「成長の限界」宣言、ウォーターゲート事件などによって、アメリカと西洋資本主義経済に対する信頼が大きく揺らいだことであった。その頃までアメリカの中国史学界は、中国とは、西洋諸国からの働きかけがなければ

何事も独力でなしえない存在だという、一九世紀以来の西洋人特有の前提に立っていた。だが、事実はそうではない。著者は、当時のアメリカ歴史学界の中国近代史研究の成果を次々と批判し、一九世紀後半以来のイギリスを筆頭とする西洋諸国の中国に対する軍事力行使を含めた様々な働きかけには限界があったことを証明し、中国社会は西洋側の働きかけだけで変化していたのではなく、独自の原理に則って変化していたのであり、西洋側からの働きかけは時として、中国の進歩発展を阻害していたこともあったということを立証した。これが、著者の研究成果の中で最も成功した前述の『知の帝国主義 オリエンタリズムと中国像』のあらましである。

その破天荒な主張ゆえに、この書物は、なかなか日の目を見なかった。本書には、この問題作があちこちの出版社から出版を拒否された挙げ句、コロンビア大学出版会が刊行を引き受けてくれるまでの経緯が詳しく描かれている。他では滅多に知り得ぬアメリカ学界の舞台裏が覗けて興味深い。

しかし、だからと言って視点を中国の側に設定すれば、中国社会の仕組み、現在に到る経緯を万事うまく説明できるわけではない。著者自身が認めている通り、一九八〇年代以降、急速に発展した東アジア全体の中の中国の位置、漢族と少数民族との関係、定住開発史、あるいはピン・ウォンや

ケネス・ポメラントツの研究が持つ危険性を考えれば分かる通り、一八世紀末までの中国経済の繁栄を再確認できても、それで中国社会の仕組みが全て解明できたわけではないからである。この時代までの中国の繁栄をいかに賛美しても、中国の国家と社会は一九世紀以降その限界に達し、いまなおその限界から脱却しきれていないからである。

しかし、ここでの問題は、新世代研究者の社会経済史研究の成果を突きつけられても、著者が、その研究手法を守り、逆にどのように独自の発想、研究課題を発展させたかにある。その成果が、著者の独創的な義和団研究である。著者は、義和団事変それ自体に注目しない。義和団事変を体験した中国人（魯迅、胡適、陳独秀）によって白眼視されていた人間集団が、一九二〇年代以降になると、理想化されるようになった現象の背後に何が隠されていたのかということの問題にする。

著者は、この問題の考察を踏まえて、歴史研究者の任務を次のように説く。歴史研究者は、正確な史実理解と真実を探究する精神を失ってはならない。さらに、歴史研究者は、研究対象としている史実が起きた時代を生きた人が知り得ないその帰趨結末を知っており、しかも彼らより幅広い空間的視野の上に立っている。これによって歴史研究者は、実際に何

が起きたのかということよりも、その事実がなぜ、どのようにして神話化されたのかを問題にし、確実な史料に基づいて、後世の人びとが思い描く特定の史実に対する幻想を打ち砕くことを最大の任務とする（本書二二七頁）。

しかし、著者の発想は、永遠に共産党の「口と舌」であり続けなければならないことを宿命づけられた中国の歴史研究者には受け入れられない。著者にそのことを思い知らせたのが、二〇一四年一〇月に復旦大学で開かれたシンポジウムであった。中国の歴史研究者との超え難い意見の違いを体験したことを踏まえ、著者は、義和団に限らず、内外の危機に直面したとき、国家体制を維持しながらこれを取り切るために、必ず過去の史実を集成し、国民統合に利用する歴代中国権力者の特徴を見ようとする。その次なる実例として注目したのは、日本人には周知の「臥薪嘗胆」の故事である。この故事評価への考察を通じて、著者は知らず知らずのうちに、史実を恣意的に改ざんし、国民を操作する権力者への警戒心を強めるようになっていく。

著者は、本書最終章でつぎのように主張する。権力者が過去の史実を理想化して国民の連帯意識を強めようとすることは、アメリカでもフランスでも行われている。前者の独立戦争、後者の大革命がその格好の事例である。権力者が史実を

持ち出すときには、必ず隠された意図がある。歴史研究者は、国民が国家権力によって恣意的に操作動員されることを防ぐために、自らが研究対象とする時代や対象から一定の距離を保つだけでなく、その時代に対する強烈な批判的問題意識を持たなくてはならない。そして、これを次のような言葉で結ぶ。「歴史家の客観性とは、徹頭徹尾、過去に何が起こったのかを理解し、これを読者に説明することである。自らが体験した過去と、これに上書きする必要のある歴史学的に再現された顔との間の違いをあまりに単純化してはならない」（本書二四一―二四二頁）。これは、ある歴史的事件を体験した個人の体験、記憶はあまりにも断片的、かつ混乱しているから、これを体系だった形に整理するのが、より幅広い視野に立てるようになった後世の史家の仕事であるということの意味する。同様なことは、エリック・ホブズボーム（『帝国の時代』1989年）みずす書房、一九九三年）やジョン・ルウイス・ギャデイス（『歴史の風景 歴史家はどのように過去を描くのか』大月書店、二〇〇四年）も指摘している。

それはまた、最近の歴史研究者に対し、文学からの影響を忘れてはならないとする著者の警告でもある。原文は読みやすく、ほかにも参考になる記述が多い。

（もとの・えいいち 早稲田大学）